

(1)

なかかわねるさとつうしん = 30 =

平成 5 年 8 月 7 日 発行

中川根ふる里通信

= 第 30 号 =

練集・発行・モアラフ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾
ふる里通信係 859-6
郵便振替口座、(名ち屋) 7-81556



ことしもナツツバキの花が美しく咲きました

柿下木冠書展

の御案内



中川根町出身の、全国にそして世界に誇る書家、柿下木冠さんの個展が、中川根町役場内、町民ギャラリーにおいて、八月五日より三十一日まで開催されております。特に八月十二日から十六日までは、柿下さんが会場にて作品などのご案内をして下さいます。又と云ふ機会です、夏休みのある里帰りの際は、どうぞ町民ギャラリーを訪れて下さい。私達地元のものも柿下さんの作品にお目にかかるのを楽しみにしております。

柿下さんは、文沢の出身、徳山中学校から静岡市立高根校在学中に石川清流先生の指導を受けられる。山崎大抱先生、手島右卿先生に師事、手島先生より「木冠」の号を授けられました。

『中川根ふる里通信』

母校は今後の題字も書いて下さいました。

書展に来場できぬ方の為に、第二回、柿下木冠書個展、作品集あり、何点かご紹介させていただきます。



隠（富嶽文化賞展大賞受賞）

河北倫明氏より

過日私は毎年関係している、静岡の富嶽文化賞展の審査を行つた。書の部門で数名の高名な書家たちと一緒に仕事を当らせてもらつた。そして、その中で大賞を獲得したのが、この柿下木冠氏の「隠」という作品だったのです。一見して独立書展

風といつて感じのものであったが、数名の審査員が、ほとんど一致して、お色の出来栄えであった。ところで、私は書をみるたびに、古人の「技より道に入る」という言葉が浮んでくる。習字という語があるように、書は字を書く、稽古から始まって技を磨くわけだが、この技術の練習を突きぬけたところから道に入つていく。つまり、形ではなく心、内面の表現、人間の表現に入っていく。そこへ進んで、書がはじめて書となるのである。そういう意味でいうと、応募作品の大半はまだ形の稽古、やの修練の段階であった。これはこれで当然だが、そこから先へ進むことが肝腎で、しかもそれは、容易な、のではない。いい加減に内面表現などと稱しても、いると、かえて滑稽なものがあつてくるのが実状である。

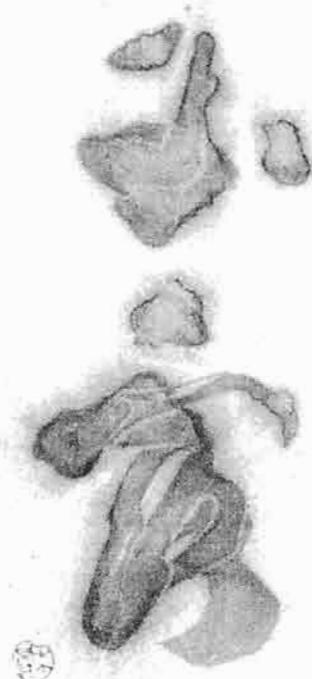
その点、木冠氏の「隠」は表現の工夫に深い気がころがつた。

柿下木冠の個展に寄せて 山崎大挖師

「書に命をかける」ということはよく聞く。激しく磨いた言葉であろう。その刹那は、真実その決意するが、喉元過ぎれば薄れてしまう。「命をかける」とは、初発から現在及び未来まで、ゆるむ事なく、絶えることなく、磨きに磨き上げる執念のことであろう。

柿下君は生来からそうであるが、頑張り屋である。生れつき、どう器用ではない。しかし永年にわたる古典追求の結果、複雑多岐にわたる表現が可能になつて来た。毎月行なわれる研究会には休むことがない。研究会には課題がある。中には嫌いな素朴もあるが、気嫌いせずに、すべて全力を盡す。又古典の臨書、創作も夥しく持つて来る。その積重ねが功を奏して、表現の幅を広げ、作品感のある作品を続々生み出す結果となる。生来豪快で、くまで深く、時には化物のようは鈍重深沈なものも出来、品格を落さないは偉とするに足る。又、光をつかむ技法も練達して来た。

昭和四十七年、毎日スペイン展で渡欧し、デモンストレー



玉

露

如 氣 宇 玉

氣 宇 如 玉

ションに筆を揮つたのを皮切りに、西ドイツ、中国、アメリカと、その場を踏むこと数多く、私などより、場数と踏んでいる。先年は静岡市と姉妹都市である、米国オマハ市で個展を開き、オマハ市の名譽市民と選せられて、ニューヨークの県立展では非常な反響を呼び、海外展に対する自信の程を固めたものである。

君は象書的表現を以て造形の美を打出し、世界美術の一環としての書の将来を目指している。書の世界性を企図して、日々努力し、その足がかりを確実に捕えたと言えよう。

君こそ、「書に命をかけている」真の怪男児である。

所詮、書は一生かかるても到達出来ない程の深遠なものである。これを契機として更に謙虚に書を行ってほしい、と思う。

※ 木の本より。① ハンノキ (カバノキ科)



高さ15mくらいになる落葉樹、沿河川のそばにはえる。刈り込みに強いので。

木をほす、柱の木として田んぼのあせによく植えられる。枝にミソムシのような姿でがらさがったオスのつぼみは冬の終わりに黄色い花粉を出す。メス花は赤紫色の小さな目立たない丸い花をつける。秋には、小さなマツボウフリ形の実ができる。すき間から、タネをちらす。実は落ちないで、冬の間ついているのがこの仲間の特徴。葉に、ミドリシジミの幼虫がいることが多い。冬は幹で白い小さな卵を見つけることができる。

榛原郡、ハイバラ、私達が呼びなれた「書きなれ」と、横浜在住の長鳴さんからお便りがありました。得がたき機会は、すべての動物として調べてみてほしい。論に達しました。結果、知らなかつたなーの結果判明いたことをお知らせします。

※ 大辞林より。② 榛の木



カバノキ科の落葉高木。山野の湿地に自生。幹は直立し、15mに達する。水田の畔に、糸掛け用に植える。雌、雄同株。2~3月、葉の出る前に暗紫褐色の尾状の雄花穂と紅紫色の小さな雌花穂をつける。果実は、松かさ状で、染料として用いる。別名ハリノキ。

特集 榛の木



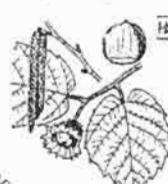
※ 自然大博物館より ③ ハンノキ (榛木、赤楊)

落葉高木。日本各地に分布。湿地に群生することが多い。花期は2~3月で、10月ごろに熟す。ハンノキは古名ハリの転訛したもの。糸架木(はさき)として植える。樹皮、材、堅果を染料とする。花は早春の季語。

山香庄、東手、河根郷と呼ばれています。中川根の地は莊園時代から山香郡とよばれたのが何年からかもはっきりしておりませんが、山香郡から古文書に残されていました。榛原郡とも考えられます。次ベーシ野本先生の大井川、その風土と文化、からも榛原郡の榛はハンノキの方でハシバミではな様にも考えられます。ハリノキとも言う事にも注目致しました。

※ 大辞林より ④ 榛 (ハシバミ)

カバノキ科の落葉低木。日当たりの良い山野に生える。葉は広卵形で鋸歯がある。若葉には紫褐色の斑紋がある。雌雄同株で、3~4月に葉より先に開花。雄花穂はひし形。果実は苞に包まれ径約1.5cmの球形で、かたく食べられる(ヘーゼル)。



※ 同。 ⑤ ヘーゼル (西洋榛)

地中海原産。ヘーゼルナッツとして食用菓子の材料となる。

大井川——その風土と文化—— 郡本寛一氏著

椿の木の田園……消えゆく風物 より（抜粋）

昭和四五、かつて藤相線と呼ばれた静岡鉄道駿遠線はその姿を消した。大正七年以来大井川下流域の人々に新しされた鉄道である。この軽便鉄道が最も活躍したのは終戦後、椿原南部へ塩、サツマイモ、米の買ひ出し部隊を束せた客車はあれども小さすぎたがそれは人々の命綱であった。

駿遠線はその名の通り、駿河と遠州の境と成す大井川鐵橋とのろのろと渡って駿遠を結んだ。車窓からは大井川下流域の人々の生活が眺望できた。広々とした散村の田の畦や小川の土手には、等間隔に並んだ椿の木が詩情豊かに続いていた。椿の木のこと。この地方では「ヤシヤンボー」と呼ぶ。そのヤシヤンボーも耕地整理のため左岸ではほとんど姿を消し

右岸の吉田、初倉の一部に細々とその姿をとどめている。田の畦にヤシヤンボーを植えるのは、下流田園地帯に住む人々の生活の知恵であった。とりわけ成長が早く、山林を持たないこの地域の人々の燃料となつた。また乾燥が早く、伐れても数日でもよく燃えた。人はこの木の薪を「トボライ薪」と呼んだ。葬式の人寄りがわかつてから伐つても間に合うといつた。娘の縁談があつたら相手の家の納屋の軒下を見よ、そこに薪がぎっしり詰まつていたら話と進めよ。と語り継がれた。燃料確保の状態が暮らしぶりを判定する基準にまでなっていたのである。

その他、田植え前に田を鋤く時、ヤシヤンボーの若枝を肥料として田に入れる事もした。また、秋、稲を干すハニテ（稲架）の働きをした。広大な大井川扇状地に並んでいたヤシヤンボーのハンテは見事であった。夏は農夫の憩いの場を作り、牛っぽい木ともなつた。そして、防潮、防風の役割をも果たした。潮風にあたると一瞬うちに葉が赤くなるのもこの木の特徴である。

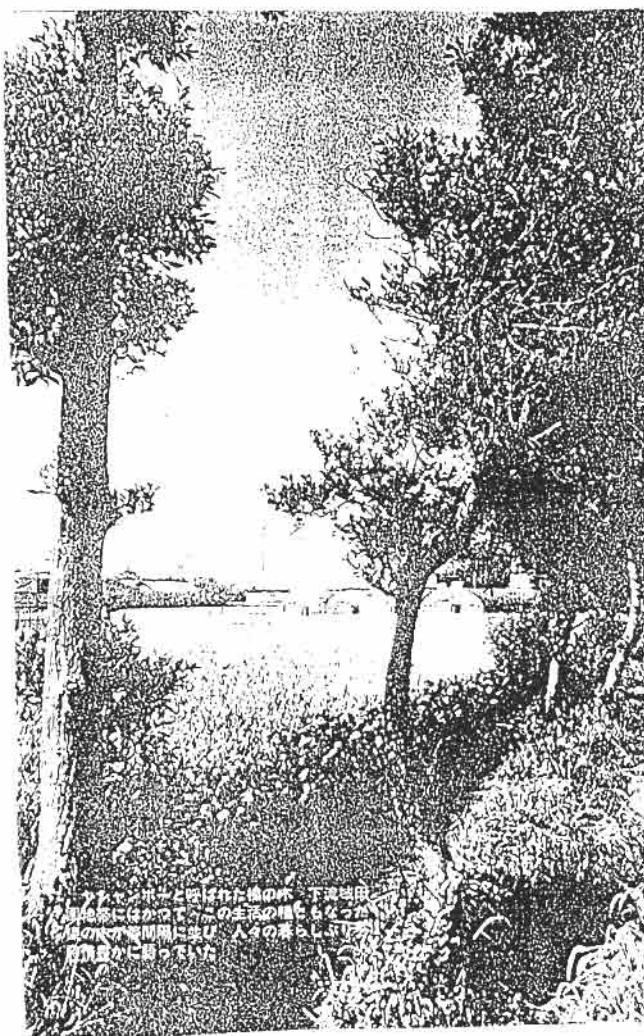
余録

中川根にくつ櫛の木があるかどうかと言つ

と、私は見たことがない様に思われます。

たた、山の雜樹の中にも、ヤマハンノキ、ヤシヤンボーが生えているのです。ヤマハンノキと、ヤシヤンボーとは、カバノチ科のよく似た木です。

ヤシヤンボーは別名ミネバリ（峰バリ）と言つて、山上に生えるハリの木という意味です。なお、ヒメヤシヤンボー、別名、ハゲシバリと言う木は、山地の裸地の崩れを防ぐため（ナギや崩壊地）に植えられる成長力の早い木です。



東京のかたすみから(3)

テレビの始めから終りまで

テレビ局の元住民達

渡邊 實夫

『テレビ局は、やたらと広くて、帰り道を職員に聞いても正確に答えるられないんですよ。正確には警備員しか知らないので、みんな警備員に聞くんです。

そう云えば、ここへ泥棒が迷い込んで、出口が見つからないまま、住みついて了い、三ヶ月もの間テレビ局内で生活し、あぐくの果てに御用になつたことがありますたね。彼の話すところによると、毎日風呂に入り、きれいに掃除されたベッドに寝起きし、和食・洋食・軽食と三つに分れた大きな食堂で好みの食事をして、職員のユニフォームを着て、誰にも疑われるこなく快適な生活をして、この三ヶ月が過ぎてしまった。この間、お金は脱いである職員のポケットから失敬し、何時もテレビでニュースや娯楽番組を見て、何不自由なく暮したといふのです。

運の盡きは、職員達が決してしない洗濯と地下室でやつて乾かしておいた時に、(テレビ局員の洗濯物は、出

入業者であるクリーニング屋しか扱わないのが普通である)

この洗濯物が目に止り、怪しまれて御用となつたというわけです。』

以上は去る五月三日にNHKラジオで放送された内容で、たまたま私が植木仕事をしながら、聴いていた

携帯ラジオから流れてきたものである。何處の局にも同じような事があるものだと、思わず一人苦笑してしまった。

あれはたしか二十七八年前の事であった。当時私はテレビ朝日のマスター(技術の心臓部を放送局では、こう呼んでいる)と云う部署の操作課長であった。

同課の若手スタッフ達が、九州や北海道の遠隔地へ鮮明な画像を送るべく、テレビ信号をカメラで撮影中であつたが、相手局の発信の都合で一般と云うことになり、スタッフは測定装置などをそのままにして席を離れた。その時周には番組放送中の要員が三十名程もいただろうか。

さて、二十分程の休憩後、ひは事にとりかゝろうとしたが、どうした、ことだろ、肝心のカメラがなくなつてゐるではないか。みんなで变了／＼と探し廻つたが見つからない。その当時、測定用カメラは高価な貴重品で、技術局にも一台しかなかった、多勢の中で出来事で、盗難はとても考えられなかつたが、どうからか出ててんだ、ので、一応麻布警察署に届け出を出した。もし盗難にあつたものであれば、当時の東京では、この種の貴重品はいざれ必ず質屋に現れるのが相場であった。

果して一二ヶ月経つた頃、麻布警察署からテレビ朝日の窓口の総務局に連絡があり、質屋から届け出があつた

由。

以下は麻布署につかまつた犯人の話である。

(1) ユニフォームは簡単に手に入り社員になりますた。(人が多くて、部署が異なれば社員同志でも全く顔を覚えられない)

(2) テレビ朝日ほど住み易いところはないだ、ベッドのシーツ、ユカタ、枕カバーは毎日交換してくれた。お金は隣りに寝ている職員の枕の下や枕元である背広のポケットから調達できた。

(7) 「お、どうした？」
 「誠に申一わけない」と私。
 すると局長は隣にいた総務部長に向って、「一体全
 体うちの守衛（総務局に所属）は何をしてるんだ？」
 しつかり勤めと果すように、厳重に注意しておけ。
 そして私はと言うと、何のお咎めも受けず、
 無罪放免となつた。時の総務局長駿島国隆氏
 は間もなく労務担当の専務取締役となり

(4) 風呂やシャワーは何時でも自由に入れた。（社員用
 ダレン用共二十四時間オーブンになつてゐる）
 (5) 食事は食堂で好きなものを自由に食べられた。
 (6) 何時でも、何処の部屋へ行つてもテレビが見られ
 た。
 (7) スタジオ、食堂、喫茶室へ行つても、エレベーター
 に乗つても、誰と顔を合せても少しも怪しまれず、
 むしろ「おはようござります」などと気持ち良い
 挨拶を受けた。
 (8) カメラに手をつける程、困つていたわけではなか
 ったが、職員が余り大切にしてるので、つい手があ
 つた。

以上のようなわけで誠に申し訳ありませんでした。
 と。

さて警察側は我が社の総務局に向つて、泥棒の住みやす
 いテレビ局では、どんな警察力をもつしても警固出来
 ない、とテレビ局側のだらしなさに厳重な忠告をした。
 それを受けて総務局長はすぐさま、責任者である私
 を呼びつけた。
 「お、どうした？」
 「誠に申一わけない」と私。
 「一体全體うちの守衛（総務局に所属）は何をしてるんだ？」
 しつかり勤めと果すように、厳重に注意しておけ。
 そして私はと言うと、何のお咎めも受けず、
 無罪放免となつた。時の総務局長駿島国隆氏
 は間もなく労務担当の専務取締役となり

これと、前後して他局でも、スタジオの演奏用のグラ
 ンドピアノや、貴重品の入つたまゝの五連のロッカーな
 ビ大型盗難事件が起きたと聞いている。何れも運び去
 す時には、テレビ局の守衛がご苦労様と云つて、握手の
 敬礼をして送り出されたのである。

テレビ局は、出演者とその関係者を中心には、毎日五、
 六千人の出入りがあり、人気稼業故、開放主義であった。
 又、舞台装置、大道具、小道具、衣装その他が毎日の一
 ようにトラック何杯分も搬入搬出されており、人の出入
 りは全く自由であった古き良き時代の話である。
 ほかにも、この古き良き時代に、テレビ局のスタジオ住人
 として名を馳せたものかいだ。それはネスミであった。



当時は殆んどが生放送で、役者、美粧、美術、プロジェクト、レクター、カメラマン、映像、音声、照明、営業部員およびスパンサー、代理店など一層粗少なくとも百名以上が参加していたが、ゆっくり食事をする時間がなくて、仕事をしながら、出前うどんやどんぶり飯をかき込む有様であった。ネズミは、その残飯を主食として繁殖したらしい。そのまま大きさたるや、テレビ出演に連れて来られたネコが、怖がって逃げ出す程。堂々としていて、中川根で見られるネズミの五倍もあったにちろうか。多くのテレビ用ケーブルの被覆が食べられたり、芯線を食いちぎられたりして、放送が止るヒューリック事故を引き起しちりもした。(テレビ局には何千本と云う大小の電線が、人間の身体、神経、血管の如く、天井、壁、床下の見えない所に張りめぐらされている)

この時代にピリオドを打たせたのは、安保斗争の後遺症と思われる過激派によるマスコミ襲撃事件の続発であり、次第に警備が厳しくなって来た。昭和四十五年三月、全労斗デモ隊が構内に乱入し、重軽傷者三十二名を出すと云う「テレビ朝日社旗引降し事件」をきっかけに、警察署と合同で警備体制を組むようになつた。

ウニカのよろこびで、出るゲリラによる攻撃には、警察力だけでは、体制が組めないから、テレビ朝日側でも自衛手段を講じるよう要請を受けたのである。かくして、私設の警備員を、テレビ局内外の要所に配置するようになつた。

これに対するかのように、エレベーター内における一場面金庫強奪事件や、マスター襲撃事件が発生し、又、放送内容に対するデモ抗議を連日のように受けたこともあった。

かかる状況が続くにつれて、私説の警備体制の益々の強化が行われた。思えば、これが、その後急成長した警備産業である。警備会社による「カードマン体制のはしり」であったようだ。

かかるカードマンによる厳重な警備体制の際をねらつて、その頃からスタジオに、「爆弾を仕掛けた」という電話、又は「仕掛けた」と言う強迫電話が、ひんびんとかかってきて来るようになった。

テレビ局は御存知の方も多いと思うが、スタジオを始めどの部屋も何時も雑多な物がちらかっており、その中では事をすることを誇りにするスタッフも多く、従つて爆弾を置かれても、それが爆弾か見当もつかない。強迫電話を受けると、社内緊急放送を流して全社員にチェックをさせるのだが、ある時そのチェックをする時間がないまゝ、朝の「モーニングショウ」が始まり、司会者、スタッフ共、カメラマイクとそのまゝ残して、スタジオから退避してしまふ。無人のスタジオが撮し出された事があつた。これを見ても目に見える敵あり、目に見えない爆弾仕掛けを恐れたことがよくわかると思う。

遂に、昭和六十二年五月、同系列の朝日新聞阪神支局が襲撃され、記者二名が殺傷されるという事件、および、テレビ朝日アーツセンター(後に上長尾小学校の同級生が見学することになる)前で、爆弾が破裂する事件が起つた。その結果、外部よりの見学は一切禁止され、社員ですら、社内出入りには額写真付身分証明書を提示しなければならなくなつた。

かくして泥棒はテレビ局から閉め出され、一方、ネズミも又、その後開発されたネズミ除け薬剤入り被覆線

の出現により、すっかりなりとひそめて了つたのである。

一九九三年六月三十日記

かるさこと夜話

二本松崎の昔

原田耕作



崎の話に、面白い話、たのいい話を私は聞いたことがない。哀しい話、恐い話ばかりである様に思う。

中里介山の長篇小説「大菩薩崎」、明治大正の女工哀史として忘れる事のできない岐阜と長野の県境「野麦崎」。近い所では文殊殺しの宇都谷崎、夜泣石で有名な小夜中山崎がある。

然し川根にはそんな物語りとなく、崎は一つも無いが、椿原と周智の郡境、枝松崎には、物語りにもならず忘れられた、明治維新の頃の殺人事件があった。商家の番頭が主人を殺して金を奪つたという説と、武士が家来に殺されて金を奪われたという説と、真偽は判らないが、二説の伝説がある。死体を狼から守るために、下長尾区の村民は、役人の検べが済むまで現場の張番に出た、という古老の口伝がある。

こんな血生臭い話のあとに崎は他には無く、多くの崎がその土地の人々に深く親しまれた崎ばかりである。学童の通学路があつた崎、村人の生活道路があつた崎、標高五口口米の下長尾の二本松崎も、そんな崎の一つである。

二本松崎は、久保尾地区の学童が、夏は汗にまみれ、冬は雪を踏んで、上長尾高等小学校へ通つた崎道である。

昔は現在と異つて随分雪が降つた。そんな雪の日には、二本松崎を越える学童は学校を休まなければならなかつた。

初めてゴム靴を川根の子供が穿く様になつたのは、大正十年だつた。それまでは藁草履か下駄での通学だつた。雪の道は下駄の歯の間に固く雪がつまって、丸く高くなつて転んで歩けなかつた。下駄をぬいで道端の木や石にたたきつけて何度雪をとつたことか。穿いている足袋も雪でぐつしよりぬれてしまつて冷たかつた。崎の坂道で黙くても平地でも雪の日の通学は大変な労苦だつた。

ゴム靴や地下足袋を穿く様になつてからの通学は、大変樂になつたのだが、自動車で通学できる現代に比べれば、極楽と地獄の相違があつた。思えば崎の地蔵様は、重い教科書のつまつた鞆や風呂敷包みを肩に通学した、又保尾の子供達の労苦の次を何年見つづけたことだろうか。

明治の末、瀬波に牛乳店ができるが、昔は牛乳や卵は病気にならなければ飲まなかつた。牛乳店で配達する牛乳は、一合へ八ロリと、その半量の五勺だつた。瓶を箱に入れて天秤棒でになつて、村々を配達した。後に自転車を用いる様になつたが、山坂道は大変な労苦であつたと思う。そんな時代、久保尾地区、麦代り、或る家に、毎日十二本の牛乳を配達しなければならない時があつた。この十二本の牛乳を届けるために雇われた近衆のおかみさんは、午後三時頃家を出て、二本松崎を越えるのだった。

瀬沢の裏山は通称鶴嶺と呼び、山腹の道は、下長尾から登る道と合して、二本松崎へ通じた。俗にこの道を鶴嶺街道と呼び、この道が最も妻側吉見等の集落へ近い道だった。しかし、牛乳を届ける家は、二本松崎からまだまだ遠い。往復五キロ余の坂道は、冬の短か日では暮れてしまう。僅か十二本の牛乳瓶を持って、人に会う、とても稀な山中夕間暮を、女の身独りで歩く事など、今日では当低考えられないことである。……その考えられないことが、昭和の初めまで現実にあった鶴嶺街道、二本松崎だった。

話は、江戸時代にさかのほる。延享五年（三四年年前）朝鮮国の使節が、徳川將軍に謁見するため、使節団一行が、東海道を上った時、島田宿の代官所から、伊久美村以北セタ村に対して、使節饗應のため、鶴三十六羽、鶴七十四羽の供ふ命令があつた。

代官所の命令はきびしく、期日迄に必ず定められた羽数を供ふしなければならなかつた。しかし、期日までの日数が短かく、火縄銃しか無かつた時代、雨が降れば獵は出来ないので、村々の名主達は困つて、その捕獲を業者に依頼したと、代官所へ返書をおいたその控書が名主であつた下泉の勝山本家に遺つてゐるのである。

川根地方へ鶴が飛来したなどとは、嘘の様な話だが、江戸時代、マナヅル、ナベヅル等は、全国に分布、飛來したという。江戸諸国産物帳という古い書物に依ると、今は北海道にしかいないタンチヨウも、山形・徳島・山口県にまで渡ってきたといふ。

鶴は一般人が獲ることは許されなかつた。大名が鷹狩りの獲物として鶴を獲り、また事ある時に代官所



① ナツツバキ (シャラノキ) ツバキ科

山中にはえる落葉高木で、また時々庭木として植えられている。幹は太い枝で通常古い皮がはける。葉はやや厚く、葉柄があり互生し、橢円形で10cm前後、全体に乾いた感じの葉である。夏(7月上旬)大きめ白い花を開き、直径は約5mm位、花弁は5個でしわがあり、裏面には白い絨毛がある。更にツバキのような花が咲くため名前がつけられた。

また、シャラノキは、この木をイントのシャラノキ(娑羅樹)と間違つたことに基づく。この間違いは、ヒメシャラ(サルスベリ・サルナメリ)にもおどんでいる。《表紙写真説明》

② 娑羅双樹について

イント、アシナガラ城外、娑羅の林の中、祝迦の病床に2本ずつ相対して生えていたといふ娑羅の木、祝迦が入滅した時鶴のうちに白く枯れ変じたといふ。

この娑羅樹はナツツバキとは全然別の種で、フタバガキ科の常緑高木、高さ30mに達する。葉は長円形、花は淡黄色で小さい。材は堅く建築材料に用いられ、樹脂はワニスの原料、果実は食用とされる。(ナツツバキと区別する為に載せてみました)

に命じて、鶴を獲らせたといふ。江戸時代、鶴嶺山から二本松崎付近は、格好ば鶴の捕獲場所であったといふ。夕ぐれか未明、狼の遠吠えと聞き下り、火縄銃の陣を張つたと古老の口伝えがのこつて居る。はるはるシベリヤから渡つてきた鶴にとつて、日本の國も一冬の安息の場所ではなかつた様である。しかし、滔滔と流れる大井川と、その空を飛ぶ鶴の姿は美しい絵ではなかつたかと思ふ。

国指定重要無形民俗文化財

徳山の盆踊り、国立劇場にて公演

9月18日(土) 午後1:30～4:00,
(2回) " 6:00～8:30
19日(日) 午後1:30～4:00

文化庁主催、郷土芸能会が開かれます。
→ 別名 から知れません。

又はない機会です。観賞してみて下さい。

入場料は、無料ですが、
国立劇場へ整理用 往復ハガキを
出して下さい。(当日直接入場を受け
付けるかどうか判りません)

1ステージ、4つの芸能が組まれています。

- ① 北海道アイヌ古式舞踊
- ② 長野県善光寺木遣り
- ③ 三重県野原大神樂
- ④ 大分県鶴崎踊り
- * 中華人民共和国天津民間芸術団
- * 太平洋上の島スバル民族芸能団

⑤ 国立劇場住所は、東京都千代田区隼町

⑥ 往復ハガキには、通信用に住所氏名を
お書き下さい。



●鹿踊



ヒーヤイ踊



狂言

資料提供、静岡県教育委員会、文化課

徳山の浅間神社では、毎年8月15日の夜、鹿踊、ヒーヤイ踊り、狂言の三部からなる
徳山の盆踊りが行なわれます。

鹿踊は、牡鹿1、牝鹿2、露払い2、ひょっこ数名で、いずれもその年20歳に満った若者によって踊り継がれて来ましたが、近年では、徳山地区の中学生によって継がれています。

この鹿踊は、昔、作物を荒らす鹿などの獣を追い払い、豊作を祈ったことから起ったと伝えられていますが、いつのころからか、神社の境内で行なわれるヒーヤイ踊りの警固をするものに變ったといわれています。

定期講読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 〒共 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を
支えます。年間4回(季刊誌)の発行を
予定しております。今回で購読の切れる方には
郵便振替用紙を同封致しますから引き続き
ご購読をお願いします。

年間予約600円のご送金をおすすめします。
3年間分位もお受けします。

住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

払い通知票

口座番号 名古屋(7)-81556

加入者名 中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先、及

発行責任者

428-03 青森県藤原郡中川根町上長尾 859-6

小沢節子

TEL 0547-56-0015

暑中お見舞申上げます。

とは形式上の事であまり太陽の光が輝かない日々が
続いております。梅雨が始まつたものはつきりせず、終り
は気象方発表はあつもの、ますく雨の日が多くな
て寒い夏の様ですね。

日照不足の加減もあって桃すももとうもろこしトマト
など甘味が今一つといったところです。

加えて北海道をおそった地震九州地方の大震災害と
天災も重なつて今年は何かちがうよつですね。
みなさんの住うている所はどうですか。

例年水不足暑い夏砂漠の声は今夏聞かれ
ればかも知れませんね。



夏休みいかがす、されるでしょ?

こちらの方は七月十四日平谷の流たい

二十三日 水川阿弥陀堂祭典

三十日 徳山愛宕地蔵祭典

(ナニマイター ルーチボン)

八月一日 智満寺施食会

九月 千手観音大祭

十五日 徳山の盆踊り

十六日 下長尾百ハタ(送り火)

など、ふる里の味と残した夏の行事がありました。

お盆のこ先祖様との語らいも加えて

緑と水とふれあひの町、中川根へどうぞいらっしゃって
下さい。

冬の号にて載せました東京メニタルヘルスアカデミーフ
レンドスペースの若者の皆さん夏のキャンプ、今年は
中川根自然休暇村(塩郷)で行なわれます。何か人
生のプラスになれば……と祈ります

今夏も昨夏が忘れられず、息子とほろかな尾瀬へ行つて来ました。ニッコウキスゲの黄色と青い空
緑の水草やつぼり生きていってよかったです。の感です。

前回号にてお知らせしました温泉試験、まだ統計が
しているのですが、"おた湯いた"の声が未だはつきり
聞かれません。朝報を待っている人いや、このままの方
が良い、と意見も様々です。次回号位には結果があ
るかも知れません。